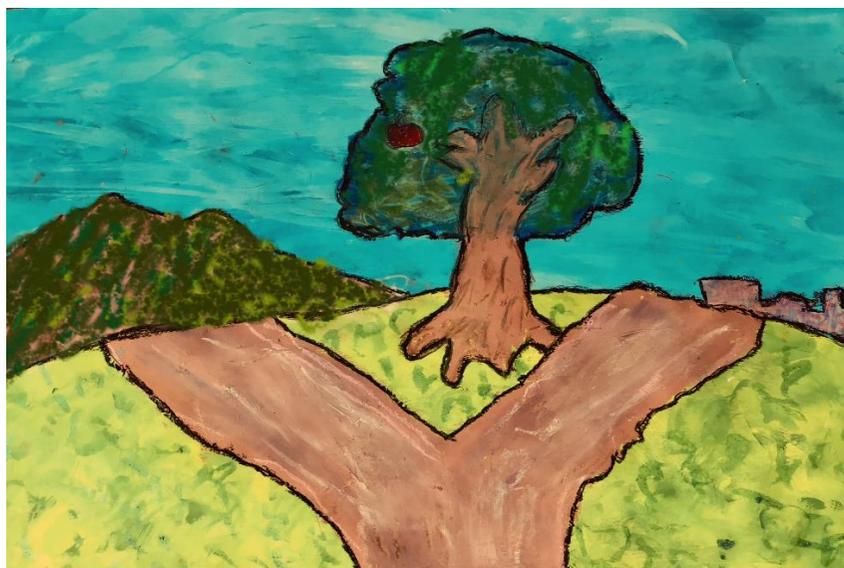


一個人史・社会問題・そして  
人と人を結ぶことを目指して—

# あつち

テーマ「分岐点」



29号

# もくじ

- ・ テーマについて 編集者 N - 2 -
- ・ 分岐点 八木 勝自 - 3 -
- ・ 私の『分岐点』 妖怪親父ゴンザレス-4~6-
- ・ 私の小さな分岐点 中村かおる - 7 -
- ・ 分岐点 青木麻衣子 -8~9-
- ・ 一人暮らし ポラリス - 10 -
- ・ 分岐点は続くよどこまでも 津山 深雪-11~16-
- ・ 歯医者 of 今と昔 八木 勝自 - 17 -
- ・ 円と鉛筆 博地翔琉(ばくち かける) 18~19
- ・ 編集後記 編集者 S - 20 -



# テーマについて

編集者N

【まっち】29号できあがりました。こうして今号も発行できたのも皆さんが原稿お寄せ下さったおかげだと心より感謝しております。

さて、今号のテーマは『分岐点』です。お一人お一人が生きてこられた人生が違うように、個々人の分岐点も違いますよね。

そのお一人お一人の大切な分岐点を書いて頂き本当に感謝です。ありがとうございました。

この個々人の人生が詰まった味わい深い【まっち】29号『分岐点』をお読み頂ければ幸いですし、編集者として嬉しく思います。

その他にも読みごたえのあるものが多々あります。

さあ、皆さんの色んな分岐点、沢山の想い等をお読み下さい。



# 分岐点

八木 勝自

今回文福の「まっち」編集部の中村さんから頼まれたテーマは分岐点ということで、物や人には様々な分岐点があり、人では生まれた所や小・中学、高校、大学や就職といったものも人生の大きな分岐点だと思います。

そして私も様々な分岐点があったと思うので、そのことを少しばかり書こうと思います。

私の場合でも分岐点は色々あって、今回は施設から地域の一人暮らしをするための分岐点を書きたいと思います。

まず私が狭い施設から広い地域に出た切っ掛けは、今の富山の自立センターをやっている平井さんが私の施設に久々に来て、「外に出ようよ！」と言うのが切っ掛けで、それから度々7時からバスで遊びに出るようになって、その頃の70年代～80年代は障害者が町などに出て一人暮らしなどをして、全国的に盛んになった時代で、私もその流れで今の暮らしがあります。

もちろんその頃は私のような首から下が動かない(その頃は右足が動かせない)少しだけ色々なことができたと思います。

話を戻して、私が施設から出たときは、私の母親は猛反対で、「お前なんか施設から出たら3日間でのたれ死んでしまう」と言われました。

もちろん70年代や80年代といえば、今のヘルパーさんなどは全く無くて、私は特定の人に介護などをしてもらいましたが、やがてそれも限界に来て、私が富山大学の色々な人に声をかけて、介護に来てもらうようにしていました。そしてその延長線上に今の暮らしがあって、当時は介護制度も無くて学生さん、大学生などが無償で私の介護に来てくれていました。

これが大雑把な今回の原稿ですが、もう少し詳しく知りたいと言う要望があれば、また書きたいと思っています。

